

みんなのゆめが、かなうといいね。

ウォールアートフェスティバル  
イン  
ニランジャナスクール2011

来年度へ向けて、  
いよいよ、  
キックオフ！！



撮影 中川十内

浅井裕介「泥絵・誓いの森」とニランジャナスクールの子どもたち

## Wall Art Festival in sengawaTOKYO

仙川でアートのワークショップ

12月11日(土)・12日(日)

13:00~18:00@ギャラリー&カフェ niwa-coya

12/7(火)~12(日) インドの芸術祭を伝える写真展 (撮影・中川十内)

プレスリリース

Wall Art Project

<http://wafes.net/>

## Introduction

2010年2月、ビハール州にあるニランジャナスクールの壁に  
日本とインドのアーティストが壁画を描いて話題を集めた芸術祭

### 「Wall Art Festival in Niranjana School 2010」

2011年2月19、20、21日、再びニランジャナスクールで開催決定！

本番に先駆けて、まずは日本でキックオフイベント、  
インド・スジャータ村と東京・仙川を結ぶプレ芸術祭が開催されます。  
参加アーティスト、浅井裕介、遠藤一郎も来場。  
作家といっしょに“自分の旗”を作ろう！ たくさんの旗を飾って、インドを応援しよう！！

## Contents Wall Art Festival とは？

インド、ビハール州、ブッダガヤ、スジャータ村にある現地トラストが運営する学校「ニランジャナスクール」  
2006年に日本の大学生50人がアルバイト代で校舎を建てた。その校舎の教室の壁を利用して、日本とインド  
のアーティストがそれぞれひとつずつの教室をキャンパスに、10~20日間ほどの滞在制作を行なう。制作中  
は子どもたちと交流し、子どもたちとのワークショップも開催する。  
完成後、3か月をめどに、壁を白く戻す。アーティストの渾身の作を敢えて子どもたちとともに消すこと。そ  
こには再生と継続の願いが込められている。

●2010年 参加アーティスト 日本/浅井裕介 インド/スリージャタ・ロイ

●2011年 参加アーティスト 日本/浅井裕介、遠藤一郎

インド/N.S. ハルシャ、ラジ・クマル・パスワン(ミティラー画家)

## Summery Wall Art Project が目指すもの

白い壁があれば。  
そしてそこに土と水があれば。  
ほかに何もなくてもアートはできる。  
それがこのウォールアートプロジェクトの出発点。

**Wall Art Festival** の会場となるのは、インド、ビハール州の農村部、スジャータ村とその周辺。

日照りの年は、作物が育たず、父たちは出稼ぎに行く、子どもたち母たちは飢える、そんな生きづらい地  
域だ。児童労働というわけではないけれど、子どもたちは家の手伝いで学校に行かないことがふつう。だ  
から識字率は今も50%程度。成長すると、都市部へ、サーバントとして働きに出る青少年も多い。  
そんな地域の学校の壁を利用して、芸術祭を開催しているのがこのプロジェクトだ。  
最初は日本からの働きかけだったが、2年目、3年目と少しずつ現地の人たちの関わりを増やし、ハンド  
オーバーしていくことを目指す。

**キックオフイベントは、サスティナブルな支援への布石でもある。**

かつて、ニランジャナスクールの生徒たちとお手紙交換をしたことのある桐朋小の子どもたちのいる仙川。  
小さな村から発信する芸術祭をみんなで知って、応援して、続けてもらうのが、このイベントの目的。  
みんなで作った旗はすべてインドに持って行って、フェス会場をにぎやかに飾る。

## Purpose Wall Art Project の3つの目的

- 1 インド、ビハール州農村部の子どもたちにアートの力を伝え、彼らの創造性を刺激したい。
- 2 芸術祭を通じて交流を生みだし、地域を活性化することで、教育システムやインフラの整備につなげていきたい。
- 3 フェスティバルを見学に来てくれる人、取材に来てくれたメディアを通じて、世界中の人たちに、ビハールの子どもたち、村人たち、ひとりひとりが、この地でこんなふうに生きていることに思いを馳せてほしい。

## Collaboration1 ニランジャナスクールについて

もともとニランジャナスクールは、地元スジャータ村出身のインド人青年によって創設された青空スクールだった。インドの中でも貧困州といわれるビハール州は、公立学校はあっても、教員数が不十分で授業が行われず、子どもたちは農家の手伝いで学校に行かないことも多い。教育が未整備なため、廃止されたはずのカースト制が根強く残り、女性にとって不利な持参金システムも当たり前のように残っている。そんな状況を変革しようとスタートした学校だった。

1997年、シッダルタ・クマル、「ニランジャナスクール」をインドのトラストとして開設。貧しい子どもたちが授業料無料で勉強ができる学校を実現した。

2006年、日本の大学生50人がアルバイト代をためて、ニランジャナスクールに鉄筋コンクリート2階建ての校舎を贈った。

現在、幼稚園から7年生まで、400人ほどが通っている。併設の孤児院においては22人が寝泊まりしながら勉強をしている。

学校が建ったために規模は大きくなった。しかし、世界各地からの寄付を頼りにした運営は常に苦しく、教師の給料も最低限となっている。

## Collaboration 2 インド人ボランティアチームについて

このプロジェクトは、定期的な開催を現地にバトンタッチしていくことを目指している。成功の保証はないが、2年目の開催を控えた今、インド人の青年たちがパワーアップしていることも事実。この芸術祭を遂行することでインドの青少年がアイデンティティを確立することを主眼に取り組んでいる。

### インドでの取り組みの詳細

●2009年9月 プロジェクトメンバーの「おかず」こと浜尾和徳が学生兼、ボランティアコーディネーターとして現地入り。周囲のインド人学生たちを巻き込み、資金繰りや、地元民やメディアのネットワーク作りなどの組織づくりを始めた。

当初は、非営利の芸術祭という概念はインド人に受け入れてもらえなかった。

根気強く説明し、説得しながらの準備活動だった。

●2009年11月 「おかず」本人と日本語を習いたい学生たち7人で「おかず塾」結成。2月の芸術祭に日本からやってくるアーティストやボランティアのサポートに当たるべく、活動開始。

- 2009年12月 地元の美術学校に協力要請。フライヤーのコンペティションを行なう。
- 2010年 2月 初回のウォールアートフェスティバル開催。アーティストが制作する傍ら、「おかず塾」のインド人と日本人ボランティアが組んで周辺の村でキャンペーンを展開。また、メディアに日参し、取材をとりつける。結果、開催3日間で4000人の来場者を記録。インド国内の新聞4紙、テレビ3局が取材に訪れ、多くの人々に農村発の芸術祭を知らせることができた。
- 2010年 7月 ニューデリーにて報告会開催。壁を白くするための白壁隊結成。子どもたちは加筆し、消すプロセスを体験。この模様もインドの新聞1紙に取り上げられる。

## 2011年度に向けて

- 地元の国立大学、マガダ大学でプレゼンテーション。学生をボランティアに動員していくきっかけとする。
- インドの助成機関、IFAにコンタクト。インド発の助成申請を試みる。
- ビハール州の観光庁にコンタクト。パブリシティを働きかける。
- インド企業にコンタクト。企業支援を働きかける。
- 近隣の村のサイクルリキシャーを、Wall Art Festivalの公式リキシャーとして組織する。

## Program キックオフイベントのプログラム

### 12月7日(火)～12日(日)「ウォールアートフェスを伝える展覧会&インドの手仕事展」

- 12月10日(金) 10:30～12:00 上映会&おおくにあきこ(ウォールアートプロジェクト代表)トーク  
「PTA活動から始まったボランティア。芸術祭のオーガナイズって楽しい♪」

### 12月11日(土)・12日(日)「浅井裕介・遠藤一郎のワークショップ&トーク&上映会」

“みんな集まれ～ インドのフェスをにぎやかに飾る“自分の旗”をつくろう！

みんなに作ってもらった旗はすべてインドに渡し、フェスで飾られます”

- 12月11日(土) 13:00～18:00 遠藤一郎「自分の旗」づくりのワークショップ  
15:00～遠藤一郎公開制作 18:00 旗を飾ってライトアップ  
18:30～遠藤一郎×浅井裕介トークイベント～上映会・インドから同時中継あり～  
トークイベント参加費 1000円(ドリンク付き) その他フード(400円～)も用意しています。

- 12月12日(日) 13:00～18:00 浅井裕介「自分の旗」づくりのワークショップ

15:00～浅井裕介公開制作 18:00 全部の旗を飾ってライトアップ

- 場所 café&gallery niwa-coya(調布若葉町 1-28-28、京王線仙川駅徒歩7分) <http://www.niwa-coya.com>

- 主催・問い合わせ Wall Art Project [info@wafes.net](mailto:info@wafes.net)

- 画材提供 クレサンジャパン株式会社 ■WAF2011 協賛グループ 国際交流基金 朝日新聞文化財団 貝印株式会社  
イーバカフェ(バラナシ) PCI Blue Bear WAF2011を応援する会

**取材のお問い合わせ・おおくにあきこ (090-2328-0230) [info@wafes.net](mailto:info@wafes.net)**